国立歴史民俗博物館蔵「南蛮屏風」の表現について

江村知子

The Depiction on the Nanban Screen at the National Museum of Japanese History

EMURA Tomoko

はじめに
❶伝来について
❷本作品の状態について
❸南蛮屏風としての表現の比較
おわりに

【論文要旨】

国立歴史民俗博物館蔵「南蛮屏風」（六曲一隻）は入津する南蛮船、港に上陸する南蛮人、舶来品や日本の品々を商う店、南蛮寺を描いた作品で、十七世紀前半の制作と見られる。本作品は神戸市立博物館蔵「南蛮屏風」（六曲一双）の右隻の構図や図様を継承した作品と見なされてきた。南蛮屏風の現存作例の中では珍しい小屏風（本紙縦八七・六㎝）であるが、画面全体の保存状態が良好でなく、研究対象として注目される機会が少なかった。

本稿では、本作品を詳細に写した明治時代の模本（東京国立博物館蔵）とその表現を比較することにより、作品そのものが有する情報を整理した。そして細部の表現について確認し、南蛮屏風としての本作品の位置づけを試みた。本作品は残念ながら後世の補修や補筆によって、鑑賞に悪影響を与えている部分も多いが、細部を緻密に描き込んだ表現や調和のとれた装飾性は、本来すぐれた作例であることを物語っている。本作品は十七世紀前半に多数制作された南蛮屏風の中でも、より私的空間で鑑賞するために通常の画面の大きさ（五尺屏風）ではなく、小屏風で制作された可能性が考えられることを指摘した。

【キーワード】南蛮美術、近世風俗画、模写